

■ 巻頭言 ■

日本小児感染症学の発展を願う

北里大学生命科学研究所 砂川慶介

2011年11月29・30日の2日間、日本小児感染症学会は岡山大学小児医科学教授 森島恒雄会長の下に「吉備路」岡山で開催された。会長講演、招請講演、特別講演、提言が各1題、教育講演10題、シンポジウム3題、小児感染症教育セミナー2題、一般演題は300を超え、加えてランチョンセミナーが14、イブニングセミナーが3、ICD制度協議会主催のICD講習会と、盛り沢山の企画がなされ、2日間ではあるがとても充実した学会であった。

日本小児感染症学会とのかかわりは、私が出張から慶應義塾大学小児科学教室に戻って、市橋保雄教授の研究室に入って初めて参加した、第5回日本小児感染免疫学研究会(慶應義塾大学の先輩、水原春郎先生が開催)からである。当時の会員数はそれほど多くはなく、市橋教授から仰せつかった事務局として名簿の整理も非常に薄く簡単なものであったと記憶している。その後の小児感染免疫学研究会は、日本小児ウイルス研究会と同じ地域で開催されることが多く、次第に合併の機運が盛り上がり、1987年に大阪で牧淳会長、大國英和副会長の下での第19回日本小児感染症学会が合併後の最初の学会であった。それから25年、このような大きな学会となったことは、一会員として非常に感無量である。

当時の市橋教授の細菌研究室では、感染症の診断・治療の臨床、抗菌薬の腸内細菌叢に及ぼす影響の研究の他、抗菌薬の小児での臨床試験に参加させていただき、日本小児感染症学会の多くの先輩のご指導を仰いだ。特に藤井良知先生、小林裕

先生、西村忠文先生には公私ともにお世話になり、経口抗菌薬22薬剤、注射23薬剤、坐剤2薬剤に小児の適応が承認され、新生児の領域では母子化学療法研究会のメンバーとして参加し、17薬剤の新生児の用法・用量が承認された。最近では抗菌薬の開発も停滞しており、非常に残念である。

また、小児科で感染症診療を志す先生方の輪を広げることを目的に、2008年より岩田敏先生、尾内一信先生、堤裕幸先生、中野貴司先生、岡田賢司先生、森内浩幸先生を世話人に、3年を1クールとして細菌感染、ウイルス感染、ワクチンをテーマに小児感染症育成フォーラムを立ち上げた。毎回20~30人のメンバーに参加をいただき、2日間にわたり講演とワークショップを行い、2011年にはメンバーを新たにして2クール目に入った。このフォーラムの参加者を中心に、お互いに協力し合って日本小児感染症学会の指導的役割を担う多くの先生方が輩出し、活躍されることを祈っている。

現在小児での未承認薬剤が問題となっているが、当学会も抗MRSA薬であるリネゾリドの小児用量に関しても公知申請を、日本感染症学会と協同行っていると聞いている。

MRSAの切り札的薬剤であるリネゾリドをはじめ、成人では使用されているが小児の用量が未承認の抗菌薬が小児でも使用が可能となるように、学会として活躍していただきたいと考えている。

今後本学会の会員数がさらに増加し、小児感染症制圧に貢献されることを切に願う次第である。

* * *